

キリストの肉と血に与る ヨハネによる福音書6章51～59節
細井 茂徳

ヨハネによる福音書第6章全体は、一つの物語として語られています。ここまでの箇所では、「命のパン」であるイエス・キリストを信じ、受け入れることの意味が示されてきました。五千人への給食の奇跡は、人々の空腹を満たすためだけの出来事ではなく、イエスこそが救い主であり、信じる者が永遠の命を得るための「しるし」であったのです。主イエスはご自身を「天から降って来た生けるパン」として示し、永遠の命に至る食べ物のご自身であると宣言されました。

ところが51節以降、主イエスは「信じる」という言葉に加えて、「私の肉を食べ、血を飲め」と語られ、人々に大きな衝撃と誤解を与えました。この表現は文字通りの意味ではなく、【聖餐】を通して示される信仰の真理を指しています。聖餐は、キリストの体と血にあずかる「目に見える御言葉」であり、信じる者に永遠の命と終わりの日の復活を保証する、恵みのしるしであるのです。

特に「食べる」「飲む」といった言葉には、頭で理解する信仰を超え、命を保つために不可欠な行為として、キリストを自分の内に取り込むことが示されています。主イエスを信じるとは、遠くから尊敬するのではなく、人生の全てにおいて主を“命の糧”として受け入れる、ということなのです。この激しい表現ゆえに多くの弟子が離れてしまいましたが、それほど十字架の救いは人の生き方全体を揺さぶる出来事あると言えるのです。

また、聖餐は主イエス・キリストと「とどまる」関係、すなわち人格的な交わりを新たに確認する場であり、義務ではなく、主に導かれて生きる信仰生活へと私たちを招くものです。私たちはキリストによって、キリストのために生かされている存在であり、日々「命のパン」である主イエスを食べ・飲み、信仰を養われながら歩むことが求められているのです。